

2020年度 須坂市小中学校のあり方検討会議 第1回 会議録（公開用）

日時 令和2年(2020) 6月12日 9:30~12:00

場所 須坂市役所第4委員会室

1 開 会（関教育次長）

2 あいさつ（小林教育長）

- 昨年度、新型コロナが私たちの生活をこんなに大きく変える前までは、これからの須坂の小中学校の、例えば豊丘小学校は来年度入学生が5名、しかも全員女子という状況で、しばらくすると、また少なくなるというような現実が私たちの須坂市にもやってきているという中で、小中学校のあり方をどういう風にしたらいいかということを考える、相談する方をどういう方々にお願いし、どうやって進めていこうかと、ずっと頭を悩ませていた。
- やっぱり教育の最大の目標というのは、時代がどれだけ変わろうと、自分は自分でいいんだって思える、適度な自尊感情の醸成を土台として、誠実に、時には挑戦的に、自分の力で人生を歩いていくための基礎を育む、というふうに考えている。
- その上に立って、少子高齢化や情報化やグローバル化という大きな社会の変化の中でこれから生きる子供達、この地域の子どもたちの教育はどうあったらいいか、という議論がこれから必要になってくる、という風に思っている。
- 本会議は、名称は小中学校のあり方ではあるが、今日、ここにおいでいただいた方々の中に、小中学校の関係でない方々に、たくさん来ていただいた理由がここにあり、子どもにとって大切な学びの連続性という観点で考えた時に、幼児教育と小学校・中学校との関係、あるいは後期中等教育、ここで言えば高校以上の、そういった教育と義務教育との連携が、つながりとして、さらに注目されなければならないというのも、私は感じている。
- ですので、今日はその面からも、そしてまた、さらに保護者やあるいは社会教育の分野での知見をお持ちの皆様にもお集まりいただいて様々なところからご自分の経験やあるいは知見を述べてもらい、それを総合した形でこの会が進められればいいと思っている。
- 新型コロナウイルスが、非常に教育の世界にも大きな影を落としている。影と言っているいいかはわからないが、最近ネットの教育相談に、これは須坂ではないが、中学2年生の女子が、新型コロナ休校からの再開で、そもそも学校に行く必要が

あるのですか？家でこれだけオンラインで勉強できるのに、コロナが収まった後、学校に行く意味ってあるのですか？という相談があった。

- また、学校は受け身どっぷりだと自分は実感していて、でも一方で、指導要領もそうですが、求められていることは、自主的に動くとか、正反対のことだと自分は感じていて混乱してしまう。オンラインで学べる学校で十分ではないか？という相談があった。本当に教育が問われている。学校教育が問われているという風を感じている。
- どうか本会議では皆さん方から、子どもたちの学びが、アフターコロナの中で、どういう風になったらいいのかということのを土台にしながら考えていきたいと思っている。そして、皆様方にご意見いただき、ご提言いただいたことを元に、来年度以降、実際に須坂市の学校の配置等も含めた学びのあり方はどういう風であったらよいかという協議会又は審議会という形で、地域の方にも集まっていただきながら話を進めていきたいと考えている。
- この会議を計画するにあたって、信州大学教授であられる伏木久始先生に相談し、委員として参加いただくことに快諾いただいた。
- 伏木先生にお願いした理由はいくつもあるが、上高井郡の教育会が8年間にわたって中心講師をお願いし、学校の授業を見ていただいたという事で、それぞれ各地域の学校の中身についても良くご存じであること。それから、しばらく前に信濃町の小中一貫校の立ち上げの際に、中心的な役割を果たしていること。
- 伏木先生と当時の信濃小中学校校長の峯村先生との共著である「山と湖の小さな町の大きな挑戦」という本がある。一貫校を目指すという意味ではないが、これからの学校のあり方を考える時に、ものすごくヒントがあると思っている。
- 伏木先生の文章に「これからの社会を生きていく子どもたちに、教師たちが子ども時代に学んだ内容や、教えられた通りの方法を踏襲するには限界が来ている。最先端の教科書の内容であっても、それを記憶したところで、20年後までそれが意味のある知識であるかどうかとも怪しいとされる状況となっている。断片化された知識をいくら詰め込んでも、知識同士を関連付けて取り込まなければ、あるいは知識を構造化して理解しなければ、生きて働く知識にはなりにくい。」という事が書いてあり、最後に「子どもが自ら学ぶ力を鍛えるためには、子どもに選択させ、試行錯誤の経験を保障することが肝要である。」と書かれている。
- 学校の、教員も含めて、これからどういう学びを作っていくのか、中学2年生の女子の「学校なんか行く必要が無いのではないか」という問いに、どう答えていったらいいのか、というヒントをこの文章の中からも読み取れるし、私たちはこれに答えるようなことを考えていくことが必要だと思っている。
- 最後に、皆さんにはどうか存分にご自分の思いを語っていただければありがた

い。事務局も話の中に入れていただくことがあると思うが、皆で須坂市の子どもたちの、これからの学びのあり方を探るといふ会にしていきたいと思う。

3 検討会議の目的と日程について（事務局から資料に基づき説明）

- 最終的に、須坂市の学びのあり方、どんな学びをしていくのか、何を大切にしていけるのかといったような、理念それから未来像を含めて提言にまとめていただきたい。
- この提言を足掛かりとして具体的な取り組みを進めていきたい。当然検討の中で学校の統廃合についても議論になると思うが、この会議はその結論を出す会議ではないという事を最初に申し上げておきたい。それについては、来年度以降の審議会の中で審議・検討していきたいと考えている。
- 教育に関する施策の計画の中では、来年度以降の教育大綱を改めて策定する時期に来ている。この教育大綱は市の第六次総合計画に合わせて策定する予定であるが、第六次総合計画も現在策定作業中。この内容を教育大綱に反映する予定だが、そこに小中学校あり方検討会の議論を含めて教育大綱としてまとめていきたいと考えている。
- この教育大綱をもとに、新たな審議会を設置して学校規模の適正化委についても検討していきたいと考えている。他市の例から、学校規模の適正化をまとめるには4年ぐらいかかると想定しています。

4 自己紹介

伏木委員：

- 大学で教育学系の専門を担当している。また昨年度から長野県教育委員会の教育長職務代理者を拝命している。このあと、県教育委員会がどういう動きになっているのかをふまえてアフターコロナの学びについての話をさせていただく。

勝山委員：

- 一昨年まで常盤中学校の校長としてお世話になっていた。今、学校現場を離れて、子どもの姿とか当時を振り返ると同時に、信濃教育会では教職員の研修を主に行っていますが、改革に対して非常に腰が重い。
- 例えばフェイストゥフェイスが大事だと言っても、ウェブ会議がこれだけ入ってきている。そういうところでどう活用するだとか、子どもとどうつながっていくか。もちろん不易流行ですが、ここで出す提言が須坂市の子どもたちをどう育てるかと同時に、教員も自分たちの意識を変えていく良いきっかけになれば

ばいいなと思いながら参加させてもらう。

本多委員：

- 須坂高校5年目。今年は再任用校長として、長野県の校長では再任用1号という事で責任の重さを感じている。須坂市の皆さんには市内の高校3校に対して、常に物心両面で支えていただいたり、いろんな機会をいただいたりして、高校にまで目をかけてくださっている須坂市には感謝申し上げたい。
- 今回のコロナ禍にあって、私たち教員が考えさせられる機会を持ったなと思っている。一番は生身の教師の存在意義は何かということをもみんな考えるようになった。生徒も、集団として集まる必要があるのか、あるいは一人で生きていけるのかとか、そんなようなことも考える機会になったかと思うが、お互いにマイナスのことばかりではなくて、得るものもたくさんあった。
- このたびオンライン授業を、即時性・双方向性をもったオンライン授業をやったが、それと同時に6月から対面の授業も始まって、今は両方を融合させたハイブリッドな授業を展開しているところ。
- 非常にこれまでとは違った授業の在り方というものが見えてきていて、先生方はむしろ明るいというか、生徒もそうですが、得るものはすごく多かったなと感じている。
- 山際京大総長が、人間にとって対面でじっくり向き合う時間というのが信頼関係を作るんだということをおっしゃっていたが、それは私たちに非常に示唆を与える言葉だったと思う。
- 学校が始まって、生徒が明るい顔で何だかウキウキしていると学校も生き生きとしている。その根底に、信頼関係という安心感がちゃんとあるからそういう空気になるのだと改めて感じたところ。
- これから社会を作っていく、世界を作っていく未来ある子どもたちがどんな学びをしていけばいいのか、幼保小中校高連携して、いい学びの場を作っていかなければならないなという思いで参加させていただきます。

近藤委員：

- 約3ヶ月の休校がやっと終わり、朝、子どもたちが元気よく登校する姿がやっと見られるようになった。保護者とPTAを代表して参加しているが、保護者として子どもたちが元気よく学校に行く姿が見られることが一番の願い。今まで当たり前であったことが本当に素晴らしいことだったのだという事を実感している。
- PTAとして課題だと思っていることは、子どもたちが少ない学校においては

PTA という形態を為さなくなってきたところも出てきていること。人数が少なくなることによって、一人のところに何役もの負担がかかってきてしまうことがあるということも実状としてある。

- そうは言いながらも、子どもがいる限り PTA 活動は絶対に無くならないと思っているし、親が頑張らないと子供たちの笑顔もないと思っているので、しっかり勉強させていただきながら一年間しっかり学びたいと思う。

山岸委員：

- 先日、2歳になる孫を大人4人が取り囲んで、この子が中学生になるころ、学校はどんな風になっているだろうという話になった。でも、大きく変わるだろうということは分かっているけど、どう変わるかは分からない、という話の中で、結局、今この子が持っている好奇心の塊のようなものを、何とかうまく育てられるといいね、という話に落ち着いた。
- それは正に今、問われていることだと実感した。自分の経験だとか育ってきたことを振り返って、その中に何かヒントがあるのかなという思いで、4点ほど話したいと思う。
- ①一人ひとりがとか、自主的にとかいう言葉が並ぶと、ぼんやりしてしまうというか、曖昧になってしまう。目指す柱が明確でわかりやすくなければならないなという事を感じた。じゃあ何かというと、学ぶ力、コロナ禍にあっては学び続ける力、これが生きる力につながるという事を柱として抑えなければいけないかなと思う。
- ②学校の魅力を分かりやすく打ち出していく。私が中学生の頃は1000人を超える大規模な学校だったので、体育館には人が入りきれないほどの規模だったが、自分が教室の席に座っていた時に、先生がこんな言葉をかけてくれたという事を鮮明に思い出す。その場面を思い出すとその時の風の感じまで蘇ってくるような、そんな体験が心に残り続けることがすごく大事かなと思う。
- チャレンジする勇氣。変えることが何でもいいわけではないけれども、その勇氣をもって行ったことが、驚くほど子どもが飛びついて変わるということが山ほどあるように思う。
- ③関わり合いの中で自己肯定感を育てるような工夫が必要かなと思う。一つエピソードを申し上げますと、私、市外の学校に勤めていた時に、小学校の半分不登校だったお子さんが、中学校に入学してきて、さて、この子をどうしようかと思った時に、市内の某洋菓子店に連れて行って、この子は社会に早く近づけることが大事かなと思って、そうしたら洋菓子店の店長さんが、地域の中で子どもを育てることは、僕たちの責任ですとおっしゃった。本当に、この一言

が、今でも自分の働いてきた中の基盤になっているのかなというような気もしている。

- ④須坂市の魅力を考えた時に、15分あればどの学校にも行けるという、このコンパクトな学校のつながりの中で、何ができるかなって、思い切った転換もできるかなって、いうことを感じた。
- 自分の経験の中から思い付きで並べてみたが、皆さんのご意見をお伺いしながら自分自身のヒントを見出していきたいと思っている。

久保田委員：

- 社会教育委員長を務めている久保田です。務めているといっても、まだ6月でちょうど1年です。今日の自己紹介の中に、これからの「学校教育についてそれぞれの立場からの・・・」とのお話があったので、若干述べたいと思う。
- 実は昨年末、市の社会教育委員会議の中で、「須坂市内のコミュニティスクールの現状や課題について情報を共有する機会を委員として設け、学校支援について考えていけたら。」という意見、要望が出された。
- そこで早速、年が明けて、市の事務局で段取りをしてもらって2月の下旬に教育委員と社会教育委員との合同の会を設けて、そこでコミュニティスクールについての研修やら情報交換、意見交換を行った。
- そんなことで委員同士、情報交換をしたというところへ、丁度この学校のあり方検討委員会のお話があり、私としては、コミュニティ・地域社会という側面と言いますか窓口からこれからの学校教育について、子ども達の活動について考えていけたらと。そんな風に参加させていただけたらと思っている。

羽生田委員：

- 須坂市の保育士・園長をやらしてもらって、その後に子育て支援センター・親子通園施設「くれよん」に4年勤めた。今は東部児童センターに勤めて、須坂小学校、須坂支援学校の子ども達の放課後支援をしている。私の勤務は子ども達が帰ってくる時間に合わせて出勤と、長期休みと今回のコロナの件では毎日出勤するような形で、今現在4年目を迎えようとしている。
- 子育て支援センターの時には色んなお母さんが、須坂市、高山、小布施、長野市からも、多くのお母さん親子さんがお見えになっていた。本当にこの世の中、核家族化で、「自分の具合が悪い時どうしよう」、「この子どもとっても育てにくいけどどうしよう」と色々な悩みを持つお母さんも多くて、その内容を聴く中で、繋げるところは保健師に繋げたり子ども課へ繋げたりして、お母さんたちが楽しく、「子育てって楽しいな」、「もう一人頑張って産んでみようか

な」という気持ちを持ってもらいたいために、できるだけお母さん達に寄り添う形で4年間関わってきました。

- 又、親子通園施設「くれよん」は、その前ははげみ園とって、重度のお子さんを保育していたのですが、そんな重度の子は、いろんな医療機関とか施設がありますので、そっちの方に受診される方も多かったので、「もっと軽くしよう」ということで、障がいの程度が軽い、発育に心配なお子さん、大勢のお子さんの中には入れきれない、お母さんもそういうところに連れて行くと、子どもが多動で動いてしまい、連れて行きにくいというお子さんを対象に、保健師さんと連絡をとりました。親子通園施設に通いながら幼稚園、保育園の方に繋げていく取組をしていました。
- 東部児童センターではうれしいことに、「くれよん」にいた子が幼稚園、保育園で力をつけて「こんにちは」と支援学校から児童センターに来る姿を見ることができました。「この子は3年間で力を付けてきたんだな」、「お母さんも頑張ってきたんだな」という出会が2、3件あり、その繋がりがあったので嬉しく思っています。
- 今は児童センターで、毎日職員も悩んだりしているのですが、須坂小学校の子ども達と支援学校の子も達と生活が一緒なので、狭い空間の中ですが、そこも一つの学びの場でもあります。須坂小の子たちが支援学校の子たちの特性を理解して上手に関われる、逆に支援の子も「お友達と遊びたい」と言う子も多いので、そういう関わりをどうやって繋げていくか考えている。
- 日々、毎日変わってきますので、毎日毎日、職員や所長がどう関わらせていったらいいのか考えています。周りにそういうちょっと特別な子が「こんな特性があるんだよ」とか「ちょっと皆と違うところがあるけど、こんな良いところがあるんだよ」ってことを判らせながら一緒に育っていく大切な場所。
- 支援学校の子もたちと思いやりをもって接し、「将来どこかで周りでそういう人がいても、対応できる力を付けさせてあげればいいな」って日々、悩みながら頑張っている。
- コロナの関係では3密できつかったんですが、学校教育課、学校の先生の協力で学校やグラウンドを開放してもらったり、学年ごとに学校の方へ登校させてもらったり、いろんな工夫をしてもらってありがたかった。
- 今後も、こういうことがあり得るかもしれないということで、毎日消毒したりして、これを機にきちんとした衛生管理、子どもの管理をやっていかなきゃいけないかなと感じている。子ども達もやっとな笑顔になって「楽しかった」って帰ってくる顔がとても嬉しい。

垂澤委員：

- 私は双葉幼稚園の園長を務めている。本園は現在 140 名程度の園児が登園しているが、なかなか幼稚園というと「新しい生活様式」からほど遠い生活というか、なかなか「3密」を避けることが難しい場となっていて、このコロナの中で突然の学びの場失った子ども達、3月の卒園式の規模が縮小になったり、4月の入園式の規模を縮小して行って、4、5月と休校が続いて、例年とは違う形で今はお子様達を預かっている。
- 日々、子ども達は元気に登園はしているのですが、やはりまだ新生活が定着しておらず泣いている子ども達がいる中で「2メートル近寄るな」とか言っても、それは難しいところがあったり、おむつを替える時に2メートル離れることなんて不可能なんでなかなか難しい。
- そんなことを感じながら日々子供たちと楽しく生活をしている。先ほど、本多先生の話の中で「教師の存在意義」なんてお話があって、「私も幼稚園としての教師の存在意義がどんなのだろうな」と考えてみると、子どもたちに何かを教えるというよりも、「子ども達と教師の信頼関係」これが何より根底にあるのかなと考えた。
- 子ども達にとっての安心が意欲につながり、またその意欲から学びに繋がるということで、やはり教師と子ども達との信頼関係ってのはこの学校教育にとって何より大事なのではなかという風に思った。
- コロナウイルスの関係で私が本当に心配しているのは2点あり、1点目はこのコロナ禍で3、4、5月と学びの場を失った子ども達が家の中でメディア漬になっているのじゃないのかなとまず心配。
- 先日、インターネットを見ていたら、若いお母さんの意見の中で「この世の中にゲームがあってよかった、ゲームがあったおかげでこの3ヶ月間子ども達が飽きず生活することができた。」という意見が載っていた。
- 今の保護者の方の考えってそういうところにもあって、これがコロナウイルスが落ち着いて、5年後、10年後に今の子ども達が大きくなった時にこのメディア漬だった問題っていうのはかなり大きく出てくるのではないかとこのころが1つ心配をしている。
- 2点目の心配として、今後第2波、第3波がくる中で学校教育として多様な学びということが失われて、知識詰め込み型の教育になってしまうのではないかとこのころ。
- この中学2年生の女の子の中で「オンラインで学べる学校で十分じゃないか」とあったが、確かに知識を学んだり習得することはオンラインで可能であっても、やはり友達との直接体験であったりとか、あるいは自己肯定感とか成功体

験とか、そういったオンラインで学べないところにこそ学校教育の意義があるという風を感じている。

- 今後第2波、第3波がきて「じゃあ、オンラインでやればいいよね」っていうことが世の中に広まると、ますます子ども達にとって5年後、10年後が心配なんじゃないかという風に考えている。
- 私は幼児教育との関係という観点から、学びの連続性ということで会議に参加していて、まだ若輩者ではあるが、さまざまな点で勉強したいと思う。

島田委員：

- 東中学校長の島田浩幸です。私は相森中学校で3年校長をして、昨年から東中学校長として2年目になった。中規模校の相森中学校から小規模校の東中学校に移って、その小規模校の良さと厳しさの両方を感じながらきているところ。
- 教育長先生のあいさつの中で、「来年度の豊丘小学校の新入生が5名である」という話があったが、本校はその豊丘小学校と仁礼小学校から入学してくる学校である。
- まさに中学校としては市内で1番小規模化が進んでいく学校であり、昨年試算したところでは5年後にはおそらく新入生は1クラスになるだろうという見込み。
- それから今は143名生徒がいるが、7年後には100名を割ってくる。その4、5年後には70名を割るのではないか。そんな感じの人口減少の学校になっている。
- 今やっている色々な活動も先々を見据えたときに持続可能かどうかいうところが心配で、子ども達にもしっかりと事実を伝えながら生徒会活動も含めて「どういう風に次世代に引き継いでいくか」なんてことも考えてもらうように昨年から心がけてやっている。
- そういった中で、例えば「コスモス街道」という25年間続いていた活動を、子ども達が真剣に考えて、場所を引き継ぐのではなくて誠心を引き継いでいくことにして、今年から場所を変えて学校の敷地内に新たに「あずまフラワーガーデン」というものを造って、地域に公開していこうとしている。
- そんな風に子ども達自身が考えて動いてくれている。そういったことができる東中学校の良さもあるなと今考えている。
- 今回のコロナ禍に関しては、本当に学校としてどのようにして子ども達と学校を繋ぎ、学びを継続していくかという面に直面して本当に悩んだり、色々考えるんだけど、またコロッと状況が変わっていく中で1人1人の教員が苦しみながら対応してくれたのかなと思っている。

- ただ、その中で、例えば5月中旬以降のところでは分散登校、クラス半分ずつ分散登校をしていくことを続けてきたけれども、小学校の時には不登校だった生徒が全くそういった素振りが無く元気に分散登校の中では学校にくることができていた。
- ところが、やっぱり6月1日以降に正常の状態がスタートすると、疲れもあってポツポツと学校を休むという状況がでてきているという現状もある。
- あと、なかなか学校にこれない時期のことも考えて、第2波、第3波を考えて、オンラインという形でGoogleを使って双方向の学習ができるようにしてテスト的な形でのオンライン授業も試みた。
- 子ども達や家庭からも高い評価を得られたので、これからも正常な場合はオンラインは使用しないけれども、家庭学習等でそこを上手く活用しながら、いつでも切り替えていけるような、そんなことを考えたいと思っている。
- 不登校の子どもについても、何とかオンラインで繋がりながら、学校に登校できなくても学びができるようなことができないか、模索、準備を始めた。多様な学びという形ではあるが、形や中身を含めて、今チャレンジをしていく時という思いで、職員も協力的にやってくれているので、ありがたいなと思いながらやっている。
- 小中学校のあり方として須崎市全体の中で、それぞれの中学校区の状況をみながら、市内の子ども達1人1人にとって良い学びができる教育にしていきたい。
- 1つのモデルとしては中学生で言うと中学生生徒会サミットというものがあってSNSルールなんてものも2年前に共通ルールを策定したけれども、やっぱり同じ市内で学ぶ子ども達が横のつながりをもって学んだり情報交換をしたりしていく。そんなことも大事な事かなと思っている。

佐藤委員：

- 昨年度から豊洲小学校でお世話になっている豊洲小学校長の佐藤富美子です。豊洲小では「多様な子達がその子らしく学べる学校」を大事にしたいと考えて日々取り組んでいる。
- 児童数減少ということについては、いただいた資料によりますと、6年後、今150人いる子ども達が100人になる。どんどん縮小していく現象は止まらないのだろうと考えた時に、やっぱり学校行事とかその他運営に係ることが今までどおりにはいかないということは必然。そこをどのように発想を変えて取り組んでいくかが問われているなと考えている。
- 私は豊丘小でもお世話になったことがあるが、やっぱり小規模の中で1番苦し

いなと思ったのは、固定的な人間関係をどう打破して気持ちよく生活するかというようなこと。

- 学校は多様な友達、多様な人たちと関わる中で生きる力をつけることが大事なという風に思っているので、そういう意味でも非常に学校の発想の転換が求められていると思っている。
- 2点目はコロナに関わって、この3ヶ月間豊洲小学校ではオンラインということとはできていなかった。だが、その分をどうしたかということ、紙ベースの課題を工夫して、それを1週間ごとにやりとりしながら子ども達の生活状況や健康状況を把握しながら、何とか乗り切ってきたという現状がある。
- 数年前にプロジェクターやデジタル教科書が入ったので、その使用については先生方に浸透してきているなと思っている。そこを今度オンライン学習というところへ視点を向けて新しく構築していかなければいけない必要性を今回のコロナの休業期間に強く感じた。
- だが、そこへ持っていくには、やっぱり教職員の研修がどうしても不可欠。まずは豊洲小学校では、「校内会議・連絡会をそれぞれの教室でバラバラに居ながらでやろう」ということで、タブレットを使用して研修を兼ねて始めている。今後も少しずつではあるが、頑張りたいなと思っている。
- それから故郷を思う気持ち、それを育てていくには地域の方と関わるのが一番大事に考えたいが、コロナによってそれが全てシャットアウトされている。そこをどのように計画し連携をとりながら続けていくのか、ということも問われているだろうと思っている。
- 小学校のあり方、課題が山積だなということも実感しているが、皆様方のご意見を聴きながら学びたいと思っている。

月岡委員：

- 森上小学校の月岡英明です。長い長い臨時休校が終わり、分散登校が始まった時に子ども達は本当に嬉しそうに学校に通ってきた。分散登校が終わって今度は6月に一斉登校が始まって子ども達が更に嬉しそうな顔で学校に来た。今までに会えなかった友達にようやく会えた。マスクをして校庭で思いっきり飛んで歩いている。あの姿が本当に印象的で子ども達も保護者にとってもきっと学校って「ありがたい所なんだな、いいところなんだな」って、そういうことを実感させられた休校期間だったのではないかと思う。
- 学校の道德の授業の中でも学、校で友達と繋がりあうこと、関わり合うことの嬉しさと楽しさの価値を皆で確認し合うような授業を実際に展開してやっている。

- 学校があるってことの素晴らしさをこのコロナのおかげで改めて感じさせてもらった。そういった中で私は須坂の学校って、「何が問題なのか、大変なのか、課題なのか」ということを、子どもの数は確かに減ってきているし、色々難しいところがあるんだなと思いながら、何なんだろうなというところを考えている。
- 私はこの前の赴任地が高山村だった。その前は大鹿村だった。僻地から山間地へ山間地から須坂へ異動する中で、それぞれの地域の課題と良さを感じて異動してきている。
- 山へ行けば行くほど問題は深刻、須坂市よりも右肩下がりのグラフが半端じゃない。須坂市は20年で100人減るだろうけど、他の所は10年で100人減っちゃう。友達100人できるかなという歌があるけど、「入学する子が100人もいないじゃん」、「5人しかいないよ」って、豊丘小のような状況の山間地の学校を私も経験してきた。
- 「友達100人いなくても鹿は2万頭いるじゃねえかよ」とか言って笑い合っていたけれど、大変な地域であっても地域の子ども、大人たちの繋がりは山へ行くほど強い。人と人の繋がりが子ども達のアイデンティティーをしっかりと育んでいるなということを感じてきた。
- 結局は人と人。そこに住んでいる人が学校と関わったり、人と関わったり、あるいはそこに住んでいる人が魅力的な生き方をしていたり「カッコいいな～あのおじさん、素敵だな～あのおばちゃん」と思える生き方をしている。そしてその人達が自分達、子ども達と関わってくれる、そんな生き方を見せてくれる。そういう風な関係性の中に子ども達の地域への愛着やアイデンティティーが確立されていくのではないかなと思っている。
- そこに持続可能性が生まれてくるという風に思っています。最近はSDGsと叫ばれているが、確かに地球規模でいけばSDGsは大切な観点なんだけど、地域からすればその中にローカルな話題が沢山あって、その中で持続可能な地域社会になっていくためにはどのようにすれば良いか、それぞれの市長さんが一生懸命考えているところだと思う。
- 須坂市はじゃあどうなのかなと。誇りある須坂市、魅力ある須坂市にならないと、子ども達はこの須坂に自分のアイデンティティーを感じる事ができない。そこをどうやって目覚めさせていくのかなというところが大きな課題じゃないかと私は思っている。
- 昨年10月のスーパー台風がきた時に、私は森上小の避難所の運営に携わった。土砂降りの雨の中、真っ暗な学校に行って、電気をつけ、校庭の門を開け、土砂降りの雨の中を来る避難者を何とか受け入れる体制を整えなきゃいけ

ない状況の中、1人で頑張っていると市役所の職員の方が助けに来てくれて、一緒になって色々やってくれて、何も判らない、経験のない中で何をやってらよいか皆で試行錯誤をする中で、準備したり体制を整えたりして頑張った。

- その苦しい時に助け合えるとか支え合えるとか手を差しのべあえる、繋がりがあえることがどんなにありがたいことかと思った。避難してくる住民の皆さんにどれだけ温かい対応ができたのか、今でも反省することばかりだけれども、ああいう苦しい時こそ本質が見えてくる。人と人との繋がりのありがたさが分ってくるというか、須坂市がどれだけ温かかったのかなとか、私自身もどれだけできたのかなってことを反省しながらその時間を過ごした。
- 自分の住んでいる地域も危なかったのも、夜中に自分の地域、小布施町に戻ったら「これヤバイぞ」となってまた避難したけれど、正直言ってどちらも温かかった。そういう時に地域の良さって出てくるのではないかなと思った。今言った持続可能性の観点から考え方をまた幾つか述べさせていただければと思っている。

関次長：

- 事務局です。教育次長を務めております関政雄と申します。教育委員会通算8年目になった。8年いるが、皆さんと一番違うのは、直接子どもとはほとんど接していないこと。躊躇なく数字で物事を言います。よろしく願います。

清水課長：

- 教育委員会の学校教育課長です。今年から学校教育課長ですが平成25年度、26年度も同じ職務をやっていて、学校教育課はこれで10年目。この会を通じて須坂市の子ども達をどういう風に育てていったらいいのか、みなさんの意見を聞きながら考えて、一緒に勉強していきたいと思う。

後藤主任指導主事：

- 事務局を務めさせてもらう後藤昭彦です。学校教育課で4年目。その前1年間は東部児童センターで、子ども達と放課後に関わらせてもらった。その前は37年間現場で小中の教育に携わらせてもらって、現在に至っている。今日は本当に、各方面の先生方のお話を聞かせて頂き、とても多くの新しい発見があった。
- 私自身が、今とってもいい学びをさせて頂いているなと思っている。これから色々な意見をまとめさせてもらいながら、改めて子ども達の学びをどうあるべ

きか勉強させていただきたいと思う。本当に楽しみにしている。いい仕事をいただいたと感じている。

北村指導主事：

- 学校教育課の北村雅です。学校教育課は2年目。どうぞよろしく願います。

中村：

- 学校教育課の中村です。教育、それから学ぶということは、人と人との繋がりや関わりの中から得るものが大きいのではないかと考えている。学校の先生方の働き方改革を担当していて、子ども達が良い学びをする為には、先生方にとっても良い職場であり、良い環境であるということが大事なのではないかと考えている。そういう思いを強くしてこの会に参加している。

5 座長選出

関次長：

- 座長の選出について、どのように選出したらよろしいか、ご意見があったらお願いしたい。

島田委員：

- 先ほど教育長先生の資料の中にもあったように、須坂市・上高井の教育に深く関わっていて、見識が大変深い伏木久始先生に是非座長をお努めいただきたいとご提案申し上げたい。

関次長：

- 今、そのようなご意見が島田委員からあったが、よろしいか。
(拍手)
- それでは、伏木先生よろしく願います。次第の6にもあるが、アフターコロナの学びのあり方ということで、伏木先生から全体の情報提供としてお話いただければと思う。

6 アフターコロナの学びのあり方

伏木座長から情報提供

7 議 事

関次長：

- 予定した時間にすでに達している。議事については、座長の伏木先生に進めて頂きたいと思う。議事の中の（１）～（３）につきましては、お手元にお配りしている資料２、３、４、５に入っているのを見てきていただきたい。

(4) 次回内容について等

伏木座長：

- 次回内容について事務局からお願いします。

事務局：

- 次回に向けて、委員の皆様から「こんな資料が欲しい」という意見があれば教えてほしい。

月岡委員：

- 先生からいただいた信濃町の資料を見て勉強させてもらった。その中の、自己肯定感と地域貢献しようとする子供の姿について書かれている所にひかれた。おそらくふるさと教育という観点で子ども達育っていくと、自己肯定感と地域に根差す子ども、私が話したアイデンティティーといったところの関係が見えてくるのかなと感じた。もし、他にもこういった示唆を与えてくれるような資料があったら、次回にお示しいただければありがたいかなと思う。

伏木座長：

- ふるさと学習とか、地域の中での自己肯定感を育てるようなイメージの資料を提供するという事でよろしいか。内容を考えて次回の会議で皆さんに話題提供します。事前に事務局にお渡しして、会議前に皆さんに目を通していただくようにする。

本多委員：

- １点、コマーシャルなのですが、須坂高校は１人１台タブレットで反転授業をやっている。来週の月曜日、英語の４時間目１２時からの授業を、もし興味がある方は連絡いただければと思う。是非見に来てください。１年生の授業。
- 伏木先生がおっしゃったような反転授業、家で基本的なこと勉強をしてきて、それを、第７世代のロイロノート（教育支援アプリ）を使って、生徒が家でやってきたことを音声で説明するようなことを数学でやっている。
- 自分がやった、例えば公式の解なんかをどうやって解いたのかを音声で説明し

て、40人が全員先生にオンラインで送る。先生はそれを自分の手元で見て、誰ができているか、誰ができていないかが分かる。

- それを生徒が授業の時に持ち寄って自分で説明していくという、そんなことを、昨日は数学をそんな風にやっていたんですが、英語でどういう風に使うのが楽しみなのですから、コロナのことでオンラインの授業を学んで、そのノウハウを対面の授業で生かしている、反転授業をしっかりとやっているのをご覧いただければありがたいと思う。またアドバイスいただければありがたいなと思う。
- 今回の件でまず感じたのは、先生たちが教材にしっかり向き合う、ICTの研究だけでなくさらに向こうにある授業のやり方だとかコンテンツだとか、つまり本来の免許の仕事がちゃんとできるようになった、教材に向き合えるようになった、ということ。
- そして、個別最適化ができるようになったので、生徒とちゃんと向き合えるようになったということが、ものすごく大きかったかなと思う。
- なぜそれができるようになったかという、1つ大きな理由があって、それは部活動がなくなったから。先生たちの中に部活動がなくなったので、教材と生徒に向き合う時間がしっかりできた。これはものすごく大きな問題。
- 先ほど働き方改革の話が中村さんからあったが、教員の働き方改革が進んだが、今、また元に戻ろうとして代替改革が始まって、また生徒も先生も忙しくなってしまった。
- せっかく個別最適化の授業、学問に対する楽しさとか、あるいは学習習慣を身に付くだとか、そういうことができ始めたのに、また部活動で奪われてしまって、先生達が部活動でどんどん忙しくなっていく。
- やりたい人はいいかもしれないけれど、苦しんでいる生徒や教師はいる。そういうことは絶対に見逃してはならない問題だと思う。甲子園がなくなったから、32校が選ばれて、と美談に語られているけど、何をやってるんだ、と思っている先生も生徒もいることは絶対に見逃してはならない問題。学校教育の中で大きな課題だという風に思っている。
- ところで次の会議の資料で、知りたいなと思っているのは、小学校から中学校にあがるときに、他の市、具体的に言うと長野市に移住してしまっているのではないかっていうことが、私が感じているところ。そこが本当に科学的エビデンスというか、数値的なエビデンスが本当にあるかどうか。もし、そういうことがあるのだとすれば、なぜなのかというところは、検証すべきかと感じている。
- ある程度私の方でも、掴んでいるところはあるが、きちんとした数字が欲しい

と思う。

伏木座長：

- 事務局の方では用意ができそうか。

関次長：

- 完璧なものかどうか分からないが、近いものを用意する。

勝山委員：

- 年間の計画でいくと、次回検討に必要な情報から、おそらく委員会としての、須坂市の子ども達の教育をどのようにしていくか、ということの大きな方向と、それに向けての具体が出てくると思う。
- 委員の方のそれぞれの立場で、かなりな情報を持っていると思うので、これから段々出てくれば良いと思っている。例えばコロナのこの問題で、先ほど島田委員からも話のあった通り、それぞれ工夫しているところはあるけれど、学校が始まったら実際どうなっていくのか、我々に与えられた大きな課題だと思うが、紙ベースでなくて結構ですので、特に学校現場の方はどんな状況なのかを次回お話をいただきたい。
- 自分の学校は分かると思うけれども、学校によって差があると思う。そういうところのあたり。教育委員会にとっても難しい作業だと思うのだが、どんな形でも結構。実際、特にこの授業形態の、デジタル教科書の問題もあるので、そういうことも含めて、ICTの活用と、従来と変わってきているところとか、課題とか、インフラ整備の問題とか、色々あると思う。

小林教育長：

- 学びの姿と支援的な部分、子ども達の。先ほどの不登校の話も。それをちょっと情報として。それぞれのお三方の学校の情報でも良いとは思いますが、学校でまとめられたものがあれば、全体のものとしてできそう。

勝山委員：

- 羽生田委員からあった障がいのあるお子さんというか、困り感のあるお子さんもかなりそういう教育の支援体制になっていると思う。そんなところが話題になった時に、こんな状況だよということが、分かるような形になっていればありがたいと思う。

伏木座長：

- 事務局の方でできる範囲でお願いします。また県教育委員会は20数名の不登校等児童生徒支援教員を各地に配置していて、その人たちがコロナ禍からの不登校の状況をまとめてレポートしてくれることになっている。そのデータを、次回に提供したいと思う。
- 続けて、何か次回に向けて、こういうデータ、こんな資料があると考えやすいというものがあればリクエストしてほしい。

小林教育長：

- 一つお願いがあるのだけれど、先ほど伏木先生の話の中に、やまほいくの話が出てきた。須坂の公立の保育園全部入っていて、2年目になってかなり動き出して、保育園の意識も変わってきている。
- 現実的に非認知的能力、それは小学校・中学校へも流れていかないといけない大事なところだと思うが、具体例でもいいので、話題を提供していただければ。園の中の様子とかありがたい。
- 公立保育園の場合にも県に出している色んなブログとかあるので資料として出せれば、それを話題としていいかと思う。

伏木座長：

- 可能であれば私も大学から調達してきますが、このメンバー全員に1人1台タブレットを用意して、どんなことが実際できるのかをさわりだけでも、経験していただかないとテーマに合わないかなと思う。
- ハウリングが起こるのでイヤホンが必要。タブレットだけではなくて。これと同じ席でやるとすると、音声をそこで閉じないといけないので、イヤホンが必要になる。連絡してもらえば大学の方でも用意してくる。

本多委員：

- 双方向型のICTを使ったオンライン授業ができているというのは、例えば本校は、全職員がほぼ研修をして全員が使えるようになっていると、またそういう環境がある。そして生徒もアンケートを取ったら、全体では10人程度その環境にないという子がいるが、それでも一気にやるぞとやりはじめた。
- できない子は学校へきてやるようにしている。本当に10名に満たない子で、ある意味家庭環境が恵まれている。だから、双方向型の授業がオンラインでできる。
- では、県内でどのくらいそういう学校があるかというと、おそらく数校、10

校未満。全生徒・全職員がそういう環境の中でできている学校は本当に数校。

- それは経済格差だと思うが、またはノウハウの能力格差もあるかもしれないが、伏木先生にお願いしたいのは、是非、教育委員会にそういう格差をなくせと、学校の中にICTの格差をなくせと。
- それは喫緊の課題で、今年中にやれとお願いしたいのと、もう一つは特に、小中学校でこういった家庭の中に格差が生まれると、おそらく教育格差に直結していく。
- これからそうなっていくと思うので、それをなくしていくのにどうすればいいのかということが重要な課題だなと思う。すぐというわけではないが、難しいけれども、経済的な状況とか、そういうのを資料にするのは非常に難しいのだけれども長野県の、あるいは須坂市の中の、小中のお子さんはどんな状況にいるんだろうというのは把握しておく必要があるのではと思うし、それをもって格差がないようにしていかなければならないのではないかな。
- 例えば、長野市は、昨日情報が入ったが、長野市が市立長野高校に職員と生徒全員にiPadを支給すると決定した。格差をなくすということ。そういうことができるのかどうかというのは非常に大事な問題だなと思う。

小林教育長：

- できる範囲で、市の状況については用意したいと思う。

伏木座長：

- 事務局へは沢山宿題が出されたけれど、なんとか頑張って用意してもらって、その資料に目を通して次回そのことを話題に検討していく。
- それから、学校の耐久年数みたいなものとか、子ども数の推移とか、それも皆さん目を通していただきたい。

8 その他

9 閉会

小林教育長：

- ありがとうございました。時間はオーバーしましたが、とても実りある会になり、よかったと思う。お一人お一人からいただいた、それこそ心の吐露を、伏木先生の課題を、事務局の方でまとめてみたいと思う。
- 次回は8月になるわけだが、皆でまた集まって、さらに深めていければいいなと思う。ありがとうございました。